

講演 「ストーンサークルは、なぜ円い？」

講師：小林達雄先生（國學院大學名誉教授）

日時：平成26年10月4日（土）13:30～14:30

場所：大湯ストーンサークル館 万座ホール

こんにちは、只今ご紹介にあずかりました小林です。本来なら、ストーンサークルのすぐそばで話す舞台設定がなされていたようですが、残念ながら雨に打たれてしまいました。

さて、縄文人は色んなことを気にして生きておりました。縄文人の残した遺跡や遺物を見ておきますと、彼らが気にしていたことや、彼らの社会の仕組みが見え隠れするところにしばしば当たります。

どうも縄文人は「^{まる}円」を相当気にしていたようです。彼らが最初に円を表現したのはイエでした。寝起きする場所であるイエを設計する時、床を円くするんです。世界的にみると四角い床が多いのですが、縄文の場合は一万年以上にわたって円が見え隠れします。見え隠れするというのは、円に始まり、やがて四角になったり、また円になったりを繰り返すということ。あるいは、関東地方では円なのに、中部地方に行くと四角とかあるんです。だから縄文人みんながいつも、どこでも円とって騒いでいたわけでもないのです。



【たて穴住居跡】^{はつりよつ}堀量遺跡／秋田県湯沢市

それにしても、最初に自分たちが寝る場所を円く設計した。これは正にスペースデザインの始まりなんです。ちょっとハイカラでしょ。カタカナをたまに入るとね。日本語というのはとても便利で、歌を詠む時はひらがな、ある時にはカタカナを差し挟むと非常に印象が強いものになります。日本語の右に出



1937年新潟県生まれ。國學院大學名誉教授。新潟県立歴史博物館名誉館長。考古学に新たな地平を切り開いた縄文研究の第一人者。

るものは、世界にないと思います。余談ですが、俳句の世界でも縄文に心を寄せている人がいる。俳人の中で縄文を気にしているというのはむべなるかな、色々と理由があるんです。

縄文人には自然と一体になって生きてきた一万年以上の歴史があります。一万年以上にわたる自然との共存・共生は、縄文を世界の文化の中では個性的に彩っています。

大陸側と比べるとよく分かりますが、縄文人のムラの周りには、ハラが広がっています。そのハラに出かけて行って、食料や日用の道具の材料を手に入れます。そしてムラに戻り、人間的な生活を展開してきました。

しかし、大陸側ではムラの周りにハラがありません。ハラは遊休地であり、すぐに開墾して征服していきます。ハラを否定して農耕

地＝ノラに替えていくんです。野良仕事のノラ。それが大陸側の流儀です。その考え方が人類の歴史を方向付け、気付いたらとんでもない深みにはまっているのが現実の大問題です。

大陸側はムラの周りのハラを否定してノラ化していく歴史を展開し、やがて四大文明を発達させます。それに対して、縄文はムラとその周りに広がるハラと一万年以上も共存・共生してきました。縄文がなぜこれだけの個性的で面白い内容の文化を形成してきたかという謎は、そこにあるんです。

その縄文人が円にこだわっていました。私たちは何かのカタチをイメージする時に、直線と曲線を元にイメージします。直線は方向性を持っていて、その先への無限なつながりを我々に予想させます。これが直線の一つの重要な性格です。もう一つが、それに対する曲線です。曲線をずっと描いていると、だんだん円くなってくるんですね。円を描く曲線は、また似たような所に戻ってくるんです。これが円の性質の不思議な、特徴的なものになろうかと思えます。その円を、彼らの寝起きの床面に用意した。これから触れていきますが、いろんなところに円が出てくる。

もう少しイエのことについて付け加えておきましょう。縄文人の描く円はいつも一つで、二つ三つと連ねて描きません。これも縄文人の特徴で、イエもそうです。折り重なって寝るわけにはいきませんから、寝起きするために一定の面積が必要になります。やがて子どもが誕生する、年老いた両親が加わる。イエが手狭になれば、大きく建て直します。イエを拡張するのだけれども、もう一つの円を描こうとはしないんです。つまり、彼らのイエはいつも一部屋造りです。一部屋造りが縄文人のイエのカタチの基本であることも、意味深長なところがあります。一部屋造りの中で、家族が顔を合わせて生活する。これが縄文人の家族意識をどんどん強めていく大きな基になっているのではないかと思います。

一部屋造りは、その後の住居の基本的なスタイルとなります。一部屋造りがいくつかの部屋を持つようになるのは、古代以降の寝殿造りなどが出てきてからになろうかと思えます。ずっと一部屋造りが続き、部屋の真ん中にあった炉が囲炉裏に替わり、その後の和風の建築へとつながっていくのだろーと思えます。そうやって円と縄文人との付き合いは、ふだん寝起きするイエの床のデザインから始



【たて穴住居内部模型】

写真提供：新潟県立歴史博物館

まったということです。

それだけではありません。ムラは、少なくとも三家族ぐらいが寄り集まっておりました。手をつないで輪を描くようにイエが配置されていたことが分かっています。私はこれを縄文モデルムラと名付けています。ここからも彼らが生活空間を円くイメージした、あるいは円にこだわったということが分かるのです。

縄文時代の前期のあたりから中期になると、直径百を越えるような堂々たる環状の貝塚が出てきます。環状というのは、円形に、ドーナツ状に貝殻が捨てられているということです。これも、縄文人の円に対するこだわりが、ゴミを捨てていく時に貝を円く蓄積していったということを表しています。

貝塚は色々な意味を持ってました。ただゴミを捨てたのではありません。貝塚からはたくさんの人骨が発見されており、縄文人は貝塚の中に墓穴を掘って死者を埋葬しています。つまり、環状にめぐる貝塚は、単に円くカタチをとったというだけではなく、そこには色々な意味が重なっている。一方では死者をそこに埋葬し、あの世にお送りするモノ送りの場であるということがはっきりしてきました。



【貝塚の下墓】北黄金貝塚／北海道伊達市

写真提供：伊達市噴火湾文化研究所

だから、壊れた土器も捨てたというだけではなく、今まで役に立ってくれてありがとうと、あの世に行けよといって、そこに捨てている。貝殻も邪魔になったからゴミとして捨てたのではなく、我々にちゃんと食べさせてくれた、それをまたあの世に送り返す。

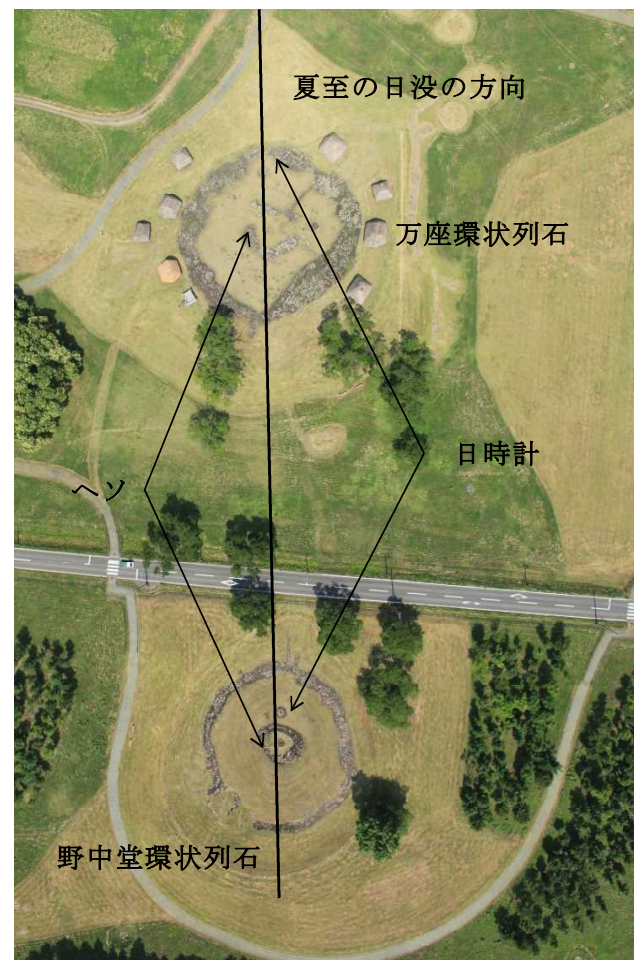
知ったようなことを言いましたけれども、それと全く似たようなことをアイヌの人たちがついこの間まで色んな場面で継承してきました。送りの場を設けて、そこで特別なマツリをしながら、あの世にモノを送っている。全部ゴミとして捨てるのではなく、関わりを持ったモノをあの世に送る場所があり、そこでマツリをやるんです。円形の環状貝塚、これも単に円くしたというデザインだけじゃなくて、そこには縄文人の色んな思いが込められたものです。

貝塚は海岸よりに形成されます。大量に貝を採って、大量に消費するのは、やはり地の利を得た海岸近くの人たちです。ところが、内陸に入ると、それほど貝はないのに円形の貝塚を造っています。そういう場所では貝と色々なゴミ、我々から見ればゴミのような廃棄物と土が混ざっています。貝のない環状貝塚は、言葉を換えて言うと、貝を抜きにした土手なんです。貝がないから全然違うものだ和我々には見えるんですが、縄文人の側に立つとそうではない。そこに彼らは土器のかげらなどを捨て、土を盛りました。そして、モノ送りの場として使ったり、その他にも色んなことを行っていた可能性があります。私はそれを劇場空間と呼んでいます。縄文人は何となく仲間と集まって、そしてムラをつくったのではなく、彼らにとっての劇場空間があったのです。

今日すぐそばでお話しできるはずだった大湯のストーンサークルも円いんです。この円も今まで話してきた円形の貝塚や、円形の土手と同じように、円いという基本をちゃんと守っているものです。万座も野中堂もちゃんと円くなっています。その円の真ん中に、また小さな輪があります。これは外側をめぐる直径四十センチ級の円形と並ぶものではない別物で、私はそれをヘソと呼んでいます。つまり、円には中心がある。その中心がヘソであって、万座にも野中堂にもちゃんとある。面白いことに円形の真ん中に中心を持っています。

その2つの中心を直線で結ぶと、北西の方向を向いています。これは夏至の日に太陽が

沈む方向を指している。ただ単に2つの円の中心を結んだだけではなく、その直線上に日時計と呼ばれる一際目立った丁寧な造りの配石があります。ヘソとヘソを結んだ直線だけではなく、さらにその線上に日時計がのっている。4つの点が一直線に並ぶというのは、よほど強固な意志がなければ並ぶものではありません。2つなら直線になりますが、3点になると直線にのせなければなりません。それが4つのるんですからね。縄文人が非常に意識して、円とヘソと日時計を結んだ。そして、その先に夏至の日没が当たるということをデザインの上で示してくれているわけです。日時計というのは、特別なカタチに仕上げた組石です。



【太陽の運行】大湯環状列石／秋田県鹿角市

面白いことに、円形の土手にもヘソがあることが分かりました。例えば、栃木県の寺野東遺跡では、縄文人は直径165センチの土手を造り、その真ん中に小さな石を並べた小さな土盛りのヘソを設けているんです。そのヘソからは、筑波山の頂に冬至の日の出を望むことができます。見事なものです。

縄文人は冬至、夏至、春分、秋分を、全部心得ていました。大湯ストーンサークルや寺野東遺跡の土手と同じように、三内丸山の6

本柱がそうなんです。あの6本柱は3本と3本が対になって6本なんです。3は縄文人の聖なる数です。縄文人は、奇数が好きだった。大湯ストーンサークルから見つかった土器の中には、口の縁が5つのものや、3つのものがあります。3や5は、とても配分が難しいのですが、彼らはその数を表現したいという思いで、土器の縁に突起を付けたのです。

つまり、三内丸山の6本柱も、3と3が向き合っているものなんです。夏至の日に、二列三対の柱の間から太陽が昇ってきます。冬至の日には、反対側に太陽が沈むのが見えるんです。ただ黙って昇るのではなく、自己主張しながら太陽が昇ってきます。ダイヤモンドフラッシュといって、6本ぐらいの光線が放射状に見えます。夏至の日の出、冬至の日の入、これは円とはただちに結び付きませんが、円の中に込められた色々な思いは6本柱にもあるということです。

世界遺産のための国際会議で、私はそのことを強調したいと思っています。そうしたらイギリスのストーンヘンジと同格です。ストーンヘンジは夏至の日の出に軸を合わせて設計されています。ストーンヘンジは世界遺産になっていますが、その設計の中での重要な要素を、縄文の遺跡は備えています。縄文人は円が好きだからやっているのではなく、円の持つ概念に縄文人の観念が込められているということを推し量らなければならない。

つまり、あれは彼らの世界観を表しているのだと考えると納得できます。円は住居から始まりましたが、四角になる時もあるんです。だから住居の床面は、絶対に円でなければならないと彼らは考えているわけではないんです。住居が円い床面を持ったのは、円に対する観念が住居と重なったんです。



【竪穴住居跡】はりま館遺跡／秋田県小坂町

ある時それは重なったものの、別次元のも

のですから、離ればなれに生きる時もあります。円い世界観に関わる要素を2百年続けてきたからそろそろ違うものとか心が動く。隣の地域はずっと四角でやってきている、そっちも面白い。円よりも四角の方が柱を立てる時の柱間とかをとりやすい。梁を設計する時に、円は大変ですよ、壁を円くするんですから。だから、こだわっていても、時に円にまつわる世界観から離れることもあるということです。

円というのは色々な性質を持っていまして、円は混沌としたものを丸く収める。そもそも円は包容力があるんです。そういう円の意味が何かなんていうのは、我々には分かりっこないんです。円は縄文人の世界観なんです。だって、わざわざ7千2百個ぐらいの石を、7^キもの上流から運んできて、しかも一人では動かせないような石まで入っていますよ。それだけの石を運んできて、円くする。我々には見えないけれども、石でもって世界観をカタチにしたんです。これが縄文人の世界観と関わりを持つ円の正体の片鱗です。

大湯のストーンサークルを見てください。きれいに円くなってはいません。凸凹してます。きれいな円にしようと思えば小学生でも仕上げることができますが、なぜか石を運び込むことにこだわっている。つまり、世界観と関係をずっと続けることにこだわって運んで来ている。そして、自分たちのムラが運んできた石を決められた場所に並べていく。働き手が多いと石の数が増えていきます。見ると分かりますが、こうして節々ができます。つまり、いっぱい石が集まっている所と、まばらにしかない所があります。いっぱいあってはみ出ている。はみ出さないで、足りないところに分けてあげたらどうかというのは私の気持ちなんです。

しかし、縄文人はそうしなかった。野蛮なんです。野蛮ということは彼らの考えがあるということです。色んなムラに分かれて暮らす人たちが、みんな円い世界観をカタチに表すため、夏になると集まってきて石を並べていくのです。働き手の多い所は石がどんどん貯まって、盛り上がってくる。そうではない所はパラパラしかないんです。だから円く造って、それもきれいな円にしようなんて誰も思っていなかったということです。円い世界観を表現しようというところに、みんなが寄り集まって一緒にやろうという心が結集して造られたものです。青森市の小牧野遺

跡も同じ。節くれ立った所と、パラパラしかない所と、渾然となって輪を造っています。

ところが、そうじゃないものもあります。きれいに円にしようというのが、北海道の鷲ノ木遺跡です。均整のとれた石の配置をして、きれいな滑らかな円を描いています。それはそういうやり方なんですよ。

彼らは円という世界観と、そして円をきれいに描くことは別問題なんです。我々にはできないけども、円から離れたわけでもないんです。子どもでも円を描きます。めちゃくちゃですが、円になっているんです。まるで、その下手さ加減は大湯のストーンサークルみたいなもんです。ちゃんとした見事な円はありません。けれども、円を描こうとしているという意味においては同格なんです。それが円の秘密です。

それからもう一つ。凸凹しているのは、きれいな円を造ることが目的ではなく、円を表現しよう、彼らが世界観に関わりを持つということを継続していくというのが彼らの真骨頂です。完成させようなんてことはゆめゆめ思っていないんです。宮沢賢治は「未完成とは、永遠の未完である」と言っています。全く僕が言いたいことと一緒にです。

節くれ立っているという話のついでに、寺野東遺跡の土手は、高さ5メートルぐらいあります。真ん中の土を掘り込んで盛り上げていくんです。黒土の下にある赤土も掘り上げている。それでも足りなくなって、その下の鹿沼土という軽石層まで掘り下げて盛っているんですよ。土手の上は凸凹です。盛り上がっている所と、凹んでいる所と全く同じなんです。大湯ストーンサークルの石がいっぱいある所とない所があるというのと重なってくるじゃないですか。

まだまだ終わってないんです。もし終わらせるなら平らにしますよ。終わらせるところに目的があるのではなくて、彼らのこだわり抜いてきた円を表現する。円というものの観念が意味するものについて、自分たちが関わりを持つために、土手を造っている。もし、大湯ストーンサークルをきれいな円にしようというところに意見がまとまれば、そんなの造作もないことだったんです。

ところが、そうはしなかった。同じようにきれいな土手を造れたはずなんだけれども、アップダウンがある。千歳にある周堤墓とい

うお墓は、一番大きいもので直径7.5メートル、環状に土を盛った堤の高さは5メートルぐらいあります。堤上面は平らで、滑らかに舗装されたぐらいにきれいに整った円を造っています。

大湯の縄文人はきれいな円にしようと思えばできるのに、していない。きれいな円にしようとするのと、ここの縄文人の世界観は密接な関わりを持つものではなかった。しかし、円形であるということ、円く仕上げるということ、あるいは彼らの世界観に関わりを持って円にこだわることについて、彼らはこだわりを持っていたということが分かるのです。

他にも意外とあるんです。例えば、北陸には、三内丸山より太いクリの木を使ったと思われる遺構があります。2メートル近いクリの大木を縦に裂いて、十本並べています。私はこれを巨木柱列と呼んでいます。これも円形をなしている。縄文人がトーテムポールを立てた人たちと同じようなやり方で造った可能性があります。



【復元巨木柱列】真脇遺跡／石川県能登町

話はこんなところでちょうど時間になりました。縄文人が円にこだわっていた。円にはいろんな観念がある。石や貝塚、土手、木などで、そのカタチを表現しようという記念物は、みんな円に関わりを持っている。住居の円もそうでしたが、円はいつもこういうカタチで表現されなければいけないというのではなく、円という世界観が独立してあるんです。だから、その世界観がどういうものと結び付くかによって、色々な表現をとるというふうに解釈することができるのです。

皆さん気付かなかったかもしれませんが、話している間、晴れろと思っていたんですよ。そうしたら、ちゃんと晴れてきました。この後もお楽しみいただければと思います。どうもご静聴ありがとうございました。